

# CESCHI NEWS LETTER

京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター ニュースレター

## 2020年度京都大学文学研究科・文学部公開シンポジウム

### 「デジタル人文学の世界へ」

12月5日(土)、コロナ禍のもと、例年第3講義室で行われているシンポジウムがオンラインで開催されました。本年度のテーマは「デジタル人文学の世界へ」で、当該分野の第一線で活躍されている3名のパネリストをお迎えして、人文知連携拠点の企画・進行で実施いたしました。

人文知連携拠点は人文知連携センター内に置かれている、専門分化した人文知の領域を横断する知の枠組を創造し、社会に発信するための部門であり、この度は人文学とコンピューティングとの接合や協働を展望する「デジタル人文学」について議論する場を設けました。目新しい方法としての時期を越え、「人間とは何か」を根源的に問いかけてきた人文学にとっても、基本的リテラシーとしてとらえうる時期にさしかかった「デジタル人文学」の課題と、あるべき教育のありようについて考えようとのことからです。

シンポジウムは、松田素二拠点長からの開会の辞で始まり、まずは国立情報学研究所が公開している日本の論文検索サイトで、おそらく使ったことのない研究者は少ないのではないと思われるほどに普及している CiNii の中心的開発担当者であり、現在は東京大学人文社会系研究科・文学部付属次世代人文学開発センター・人文情報学部門准教授の大向一輝さんからの報告がありました。大向さんは、主要なデジタル人文学分野を人文学と情報学の交差する領域と位置付け、「人文学研究への情報技術の適用」と「情報学研究への人文学の知見の適用」との両面を持つことを指摘されました。そしてこの分野になじ

京都大学文学研究科・文学部  
公開シンポジウム

# デジタル人文学 の世界へ

オンライン開催

報告者(五十音順)

- 大向一輝**  
東京大学大学院人文社会系研究科准教授  
(人文情報学、ウェブ情報学)
- 永崎研宣**  
一般財団法人人文情報学研究所主席研究員  
(人文情報学、私学学)
- 橋本雄太**  
国立歴史民俗博物館アキュアトラック助教  
(人文情報学、科学史)

コーディネーター  
**喜多千草** 京都大学文学研究科教授

人文知連携拠点は、専門分化された人文知の領域を横断する知の枠組を創造し、社会に発信するために設置されたもので、昨年のセンター発足と同時に、いろいろな形で文学研究科の研究成果の発信を活発に行っていました。今回のシンポジウムでは、その発信の一環として、人文学の領域とコンピューティングとの接合や協働を展望する「デジタル人文学」について議論する場を設けます。目新しい方法としての時期を越え、「人間とは何か」を根源的に問いかけてきた人文学にとっても、研究者の基本的リテラシーとして捉えうる時期に差し掛かった「デジタル人文学」の課題と、あるべき教育のありようについて考えます。多数のご参加をお待ちしています。

2020年  
**12月5日(土)**  
13:30~17:00  
オンライン開催 参加無料 申込先着順(先着480名)

QRコードまたは下記URLよりお申し込みください。  
[http://bit.do/KU\\_bun](http://bit.do/KU_bun)  
(もし定員に達した場合は、下記メールアドレスにご連絡ください。お急ぎください。)

主催 京都大学大学院文学研究科  
協賛 京大以文会  
お問い合わせ 京都大学文学研究科総務班  
TEL:075-353-2700 (11:00~17:00)  
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/>

seminar2020\_bun@kurs50011.sakura.ne.jp

みのない参加者にもわかりやすく、Google Books Ngram Viewer などの有名な事例を使って、大量のテキストデータが得られた場合に、それを「遠読」することでどのような知見が得られるか(大規模化)や、資料に内在する知識の明示化や体系化(多層化)、人文学研究の資料の充実を協働作業で図ることのできる可能性(共有と協働)の3つの特徴について説明されました。そして、デジタル人文学の課題として、大規模化については解釈や説明は技術が示したデー

タだけからでは行えないこと、多層化についてはデータを作成することの手間を誰が負うのかということ、共有と共同については参加者をどう集めるかと結果の信頼性をどう保つかということを挙げられました。その上でデジタル人文学教育について、東京大学で実践されている教育内容の概要をご紹介いただきました。

次の報告者は、一般財団法人人文情報学研究所首席研究員の永崎研宣さんでした。永崎さんはデジタル人文学の領域のパイオニアのひとりで、東京大学ほかでのデジタル人文学教育にも早くから携わって来られました。今回の発表では、デジタル人文学では、「方法論の共有地」と呼ばれる、広く活用できる知見・技術の共有が進んでおり、分析結果、分析手法、それを実現する構築手法、教育手法、共有手法、それらに基づく実践などを共有し、その共有地に貢献することが成果とみなされていることを紹介されました。こうした貢献について、学会でどう評価するかについて、アメリカでは歴史学や文学の領域でガイドラインが提示されていることなどにも触れられました。そして内容における新規性や汎用性をもとめる人文学各分野と、手法としての新規性や汎用性を求めるデジタル人文学分野とが相互に刺激しており、人文学研究者はその双方の広がりの中で、ときには人文学寄りに、ときにはデジタル人文学寄りに、と自在に研究成果をだしていくことができる可能性を示唆されました。そして大向さんとともに取り組んでいる東京大学でのデジタル人文学教育では、「人文情報学概論」において、前期には人文学研究側に寄った情報リテラシーの習得を目標に、最新の技術動向を踏まえた内容を教えているのに対し、後期にはデジタル人文学に寄った、情報処理学会の人文科学とコンピュータ研究会の学生セッションでの発表を目指して指導するといった具合に、この両輪をバランスよく意識したカリキュラムを作っていることを紹介されました。

最後に国立歴史民俗博物館テニユアトラック助教の橋本雄太さんに、人文学研究者から、デジタル人文学のツール開発まで行うようになった、ご自身のキャリアをふりかえることを通じて、デジタル人文学教育のあり方についての見通しについて考えておられることをお話しいただきました。本研究科の旧情報・史料学での情報学と人文学の融合したカリキュラムにおいて、プログラミングの力もつけたことなどが紹介されるとともに、総合大学として古くから学際研究が盛んだった京都大学らしい繋がりを生かした、文理融合の古地震研究会で、大向報告にも触れられていたデジタル的な協働作業による古地震関係史料の翻刻プロジェクトのシステム開発も行なったことが報告されました。

発表ごとに、フロアからも活発な質問が寄せられ、オンラインでのシンポジウムの良さを生かして質問内容を報告者も他の参加者も詳しく読みながら、質疑応答することができました。3つの報告後のディスカッションでは、これからのデジタル人文学教育のあり方について、JDH（日本デジタル・ニューマニティーズ学会）でも外国のシラバスを集めて共有したりし始めていること、またさまざまな大学で行なっている授業についてのリソースを共有する可能性についても話し合われました。また人文学にとっての情報リテラシーという観点から、どの程度の深さまで技術の理解に導くかについては引き続き検討が必要なことや、人文系の研究者と情報学の研究者が協力していくにはお互いの領域についての理解が必要なことなどについて討論しました。最後にデジタル人文学分野で標準化やルール共有が進展していることについて、再確認して会を終えました。

## 「尊攘堂パノラマツアー」・「京都大学構内遺跡紹介映像資料」の公開

### 京大文化遺産調査活用部門作成の映像資料

京都大学構内の遺跡とその調査成果を、映像資料として紹介いたします。アイコンをクリックすると別窓で動画の再生が始まります。

※ 動画を再生するにはvideoタグをサポートしたブラウザが必要です。  
 ※ ファイルサイズが大きいため、ご使用の環境によってはうまく再生できないことがあります。その場合はファイルをダウンロードしてご利用ください。



京大文化遺産調査活用部門  
 マスコットキャラクター  
 きよーたんくん

#### 尊攘堂パノラマツアー



尊攘堂パノラマツアー  
 (外部サイト)

#### 京都大学構内遺跡紹介映像資料



京都大学キャンパスの遺跡  
 公開日: 2020/07/15  
 再生時間: 6分27秒  
 ファイルサイズ: 591MB (MP4形式)  
[ファイルをダウンロード](#)



近代の出土文字資料  
 公開日: 2020/07/29  
 再生時間: 4分40秒  
 ファイルサイズ: 511MB (MP4形式)  
[ファイルをダウンロード](#)

京都大学構内遺跡から出土した縄文時代から近代にいたるまでの遺物の展示施設として利用していた尊攘堂は、2018年6月の大阪府北部地震により天井の一部などが破損し、閉室しておりました。2019年度に建物の修理が行われたことを契機として、展示のリニューアル作業を進め、3月はじめに全ての作業を終えましたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、一般公開ができない状態が続いています。

そこで当センター京大文化遺産調査活用部門では、2020年度の事業として、京都大学構内遺跡に対するこれまでの調査・研究成果を広く社会に発信し理解を深めていただくために、オンラインでの新たな公開を始めることとしました。

まず、360度観覧できるパノラマ写真を用いて、リニューアル後の尊攘堂内部をご覧いただけるよう、尊攘堂パノラマツアーをオンライン公開しました。主要な展示品については、詳細な画像と解説文を用いて観覧できるようにも配慮してあります。

また、資料室のオンライン公開にあわせて、京都大学の構内に所在する遺跡の調査・研究成果を一般向けに紹介する映像シリーズ「京都大学の遺跡」を作

成・公開をはじめました。本シリーズは、京都大学に所在する特徴的な遺跡や遺物を、映像と音声(約4分～7分前後)を用いて紹介するものです。これまでに以下の映像を公開しました。

- ・ 京都大学キャンパスの遺跡 (7月15日公開、英語版10月5日公開)
- ・ 近代の出土文字資料 (7月29日公開)
- ・ 京大キャンパスの弥生時代—水田跡の発掘調査— (8月5日公開)
- ・ 埴輪の発掘—考古学の醍醐味— (8月24日公開)
- ・ 乾山焼と蓮月焼—京都大学病院構内出土の江戸時代遺物— (9月2日公開)
- ・ 考古資料からみた激動の幕末と京大キャンパス (9月16日公開)

今後、映像紹介の英語版を順次作成・公開していく予定です。映像を通して京都大学構内遺跡の特色と重要性について理解を深めていただけますようよろしくお願いもうしあげます。



## センター開催行事日誌(2020年4月～12月)

### ■人文知連携共同研究会

人文知連携拠点では、文学研究科の専修・専攻の枠組みを超えて、異質な知や価値の共存に資する学術的知見を共同して探求し、新たな人文知の創成に貢献することを目的として、複数の専修・専攻に属する文学研究科教員をメンバーとする共同研究プロジェクトを進めています。

2019年度にはじまった「古代人の感情に関する共同研究」(代表：南川高志)と「人文学の方法論」(代表：伊勢田哲治)の二つの研究会にくわえ、2020年度からは、「東アジア「間文化」研究」(代表：杉浦和子)と「グローバル視点の近代史教育」(代表：高嶋航)の二つの研究会が開始されました。各研究会の詳細は、以下のWPを御覧下さい。

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/kyoudou/>

### ■2020年8月6日(木)

(文化遺産学・人文知連携センター)

京都大学オープンキャンパス2020の文学部の紹介ページの中で、文化遺産学・人文知連携センターの紹介ビデオが公開されました。現在、センター紹介ビデオ詳細は以下のアドレスで視聴できます。

<https://www.youtube.com/watch?v=U5ivSJ1UyhU>

### ■2020年9月23日(水)

(人文知連携拠点) 人文知連携共同研究会 第一回東アジア「間文化」研究会を開催しました。

### ■2020年10月22日(木)

(人文知連携拠点) 人文知連携共同研究会 第二回東アジア「間文化」研究会を開催しました。

### ■2020年11月26日(木) (人文知連携拠点)

(人文知連携拠点) 人文知連携共同研究会 第三回東アジア「間文化」研究会を開催しました。

### ■2020年11月28日(土)

(内陸アジア学推進部門)

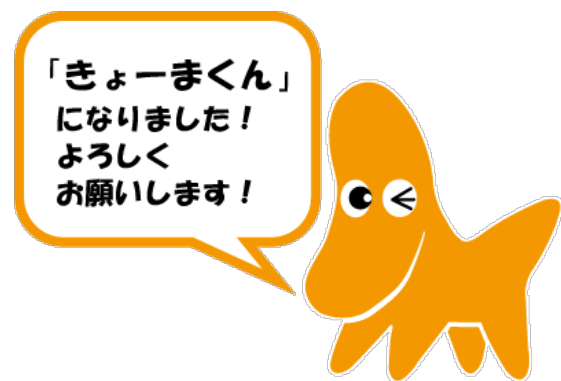
第84回羽田記念館定例講演会を開催しました。

### ■2020年11月1日(月)

(人文知連携拠点)

東洋史研究会大会のオンライン開催支援をおこないました。

■京大文化遺産調査活用部門では、吉田南構内より出土した平安時代の土馬をモデルにマスコットキャラクターを作成しました。公募の結果、「きょーまくん」と命名されました。今後、広報などのキャラクターとして活用していく予定ですので、よろしくお願い申し上げます。



京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター

〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

URL: [http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/ces-top\\_page/](http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/ces-top_page/)

